日本の子ども達の顔は独特の美しさをもっています
それは戦争を知らない子ども達の顔です

元海兵隊員でベトナム戦争に従軍したアレン・ネルソンさんは、特に子ども達に「本当の戦争の話」を知ってほしいとアメリカと日本の各地で講演をしている。たまたま2月に神戸で開かれた講演会を聞く機会があったが、彼の話は実体験を元にしたものだけに非常に説得力があり、心に響くものだった。ベトナム戦争というともう四半世紀以上前の話だが、今でもアメリカは次々と世界各地で戦争をしている。また日本もその戦争に協力しており、平和憲法も改変されかねない状況となっている。そんな今だからこそ、戦争とは実際にはどういうものかもっと広く知られる必要があると感じ、許可を得て彼の講演と質疑をここに載せることにした。（浜田）

「本当の戦争の話」を語りつづける
元ベトナム従軍米海兵隊員
アレン・ネルソン さん

アレン●　数年前に長崎と広島の原爆資料館を訪れることができ、そこでアメリカが一般市民・女性や子ども・病院や学校の上に原爆を投下したことを知りました。行ってはじめて、アメリカの小中学校で受けてきた現代史、特に原爆に関する教育の内容が全くのでたらめでデマ宣伝であることを理解しました。

原爆の犠牲者になった子ども達や赤ん坊達はアメリカに対して何をしたのでしょうか。涙を流さざるを得ませんでした。そしてあらためて、アメリカこそがテロリストのキングであることを知りました。まさにアメリカは世界にテロの見本を示したわけです。

アメリカの歴史を勉強してみると、アメリカはテロの上に建国された国であることがわかります。最初にヨーロッパからアメリカに来た白人たちがしたことは、アメリカ先住民たちを多数虐殺し、彼らの土地を奪うことでした。次に彼らはアフリカ大陸から我が先祖の黒人達を鎖につないで拉致し、奴隷として使用したわけです。このようなアメリカが他国をなぞらえてテロ国家とかテロリストなどと呼ぶ資格はありません。

日本政府は傀儡政権

私はどうして今も日本や沖縄に大きな米軍基地が点在しているのかいぶかしく思っています。あらためて現実を直視すれば、日本は文字通り被占領国家であると言わなければなりません。日本本土の多くの人たちは政府のデマを信じて、アメリカ軍基地は日本人を外的から守るために存在するということを信じているようです。しかし実際にはそれは日本政府を支配するためにあるわけです。そういうことを言っても本土の人たちはなんと過激なと信じないかもしれませんが、沖縄の人たちは日々の生活の中で占領の事実に対面しているので真実を理解しています。

占領下にある状態はイラクやパレスチナと同じですが、彼らは自由のために戦っています。日本がちがうのは占領軍のために税金を使っていてもらっているということです。

このような日本が真の民主国家といえるはずはありません。日本政府は文字通り傀儡政権と言わざるを得ません。日本の首相はほんとは一国の首相ではなく、さしづめアメリカ・日本州知事ということになります。みなさまの上には大統領が君臨しており、その名前はジョージ・ブッシュといいます。

ですから何か問題をかんじた時に国会に陳情しても無駄で、ワシントンに出かけなければならないわけです。（＊この話をきっかけに実際にワシントンに出かけて署名を手渡そうという動きがあります→p３囲み）

ベトナム戦争従軍の経験から、私は戦争や暴力は決して幸せや平和をもたらすものではないと思います。私がさいわいベトナム戦争を生き延びて家に帰ってきた時に、姉や妹は大喜びで迎えてくれましたが、しかし母の態度は違っていました。一目私を見るなり、おまえは私の息子ではないと言い放ちました。母の目は正しく、ベトナム戦争から帰ってきた私はもう18才で家を後にしたときの陽気で人づきあいがよいアレンではなく、人を

次頁に続く

前頁から続く：

寄せ付けず引きこもって精神的な痛みをもつ寂しい人間になっていました。戦場での殺戮や暴力の数々が私を全く別の人間に変えてしまったのです。ベトナムで死んでいた方がましと何度思ったことでしょう。自殺をはかったことも一度ならずありました。自分では知りませんでしたが、戦争後遺症（PTSD）をわずらっていたわけです。一日中引きこもってぼんやりと窓の外を眺めるだけでした。戦争のことを人に話すことはできませんでしたが、ジャングルでの戦闘のことが一日も頭から離れない日々でした。夜になると悪夢にうなされ、累々たる死人の顔がよみがえり、がばっと跳ね起きて叫ぶといった状況が絶えずありました。そのため家族は恐ろしくなりはじめ、２週間たって母から出て行ってくれと言われました。そこで私はホームレス生活を始めるほかなく、古びた空きビルで暮らしはじめました。

何か大切なものが死んでいく

ある日、街角で若い女性に出会いました。かっての高校の同級生で、小学校の先生をしていました。彼女は私がベトナム帰りであることを知っていて、生徒達に戦争体験を語ってほしいと頼みました。もちろん戦争の想い出はただ忘れたいだけでしたので、私の答えはノーでした。しかし彼女は子ども達にお願いの手紙や絵を描かせて再び私を訪ねてきました。それを読んで私は心を動かされ、行かざるを得ないと思いました。ところがいざ子ども達の前に立っても、私がジャングルの中でしてきたこと見たことを正直に話すことは出来ませんでした。私は戦争の恐ろしさをぼかした一般的な話をしました。しかし質疑の時間になって一人の女の子が手を挙げて次のような質問をしました。「ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？」

私はすぐには答えられませんでした。人殺しをしてきたという事実を語れば、子ども達は私を大悪人かモンスターだと思って怖がって逃げてしまうだろうと心配したからです。しかし子ども達に対して正直である必要があると思い、私は目をつぶって必死の思いで「イエス」と答えました。

すると思いがけないことが起こりました。子ども達は逃げ出すどころか、立ち上がり私のもとにきて、一人一人が私をしっかりと抱きしめてくれたのです。それは私にとってとても感動的な瞬間で、私は思わず泣き出してしまいました。そして子ども達も先生も泣きました。

これをきっかけに、私はなんとかPTSDの治療に取り組もうと決心しました。そして元気になって戦争の真実の体験を子ども達に教えなければならないと思いました。しかしそれは容易なことではありませんでした。さいわい私にはダニエル先生という立派な精神科医との出会いがありましたが、それでも18年間にわたる苦しい取り組みがありました。そのため戦争体験を語れるようになったのは40才を過ぎてからです。

今でも私にとって戦争体験を語るもっとも語りがいのある聴衆は小学校の４，５，６年生です。子ども達は大人が思いつかないようなほんとうにすばらしい質問をしてくれるからです。

たとえば湯布院の小学４年生の男の子はこんな質問をしました。「人殺しをするのはどんな気持ちですか？」

これは大人からは絶対聞かれない質問です。しかし戦争の恐ろしさを理解するのに、これほど大事な質問はありません。人を殺すのは個人的な体験としてもとても恐ろしいことで、思わずげろを吐いてしまうほどです。戦争映画の中では、敵を殺した兵士はそのまま立ち去るというふうに描かれていますが、現実の戦争ではそうはいきません。殺した相手の死体に近寄って体をさわり、ポケットをさぐって何か書類がないか調べなければなりません。恐ろしい気持ちになります。仲間の海兵隊員が自分の殺した死体のそばに行って、狂ったように身を地面に投げ出して泣き叫ぶのも見てきました。

古参兵は、誰でも最初は気分が悪くなるもんだがそのうち慣れてくるさと言います。でも人を殺すことにはついに慣れませんでした。人を殺めるたびに、自分の中の何か大切なものが死んでいくという思いになりました。

戦争の臭い

私自身も子どものころからさんざん戦争映画を見て育って来ました。映画ではいつもかっこいい主人公がいて、バックには美しい音楽が流れています。そして主人公はいつも正々堂々と戦い、女や子どもを助けます。

私は前後13ヶ月、ジャングルで戦い、この手で多くの人を殺しました。たくさんの人が死んでいくのを間近で見てきたわけです。そしてベトナムのジャングルで最初に学んだことは、本当の戦争というのは映画とは全くちがうということでした。本当の戦争にはかっこいいヒーローはいませんし、バックに音楽もありません。正々堂々もありません。女子どもを救う人もいません。女子どもは自らの足でにげまどうほかありません。本当の戦争にはルールはありません。敵は見つけ次第殺します。眠っている敵を見つけたら、映画では相手の枕をけって起こし、武器をとれと言いますが、実際には眠ってるまま射殺します。

戦場でもっとも苦しむのは女性と子どもとお年寄りです。私たちはよくベトナムの村を襲撃しましたが、男達は銃をもって戦い、女子ども老人達はジャングルの中に逃げ込みます。戦闘が終わり、男達を殺したあと、ジャングルに隠れた女子ども達を探します。でもそれは簡単なことで、３日も４日も隠れているとそのうち子ども達がおなかがすいて泣き出すのをじっと待つだけです。年寄りたちは若い人たちに着いていけないので、先に行きなさい、後から行くからというジェスチャーをしますが、彼らは決して後から追いつくことができません。あちらこちらに年寄り達の死体が転がっているということになります。しかしそれで終わりではありません。死体を数えなければなりません。男の死体、女の死体、子どもの死体に分けて、村の広場に積み上げます。

もし死体に首がなかったり手足がちぎれているものがあれば、それを探して集めてきます。またジャングルの中で死んだ人たちの死体も集めてこなければなりません。それには２つの方法があります。一つはジャングルの中でじっと耳を澄ませていると、ハエが飛ぶ音が聞こえてきます。その音をたどっていくと死体にたどりつきます。もう一つの方法は臭いをかぐことです。腐乱死体の臭いはとても強烈で、思わず胃の中のものを吐き出し、目からは涙が出、鼻汁が出てきて、全身の力が抜けてしまうような臭いです。この臭いを私は未だに忘れることができません。これが戦争の臭いです。戦争映画の中には名画と言われるものがありますが、いかなる名画もリアルだとは言えません。この臭いがないからです。もしこの臭いを再現できる映画があるとしたら、みなさんはもう戦争映画はごめんだと思って二度と映画館に行かなくなるでしょう。

本当の戦争の臭いとは腐乱死体の臭い、死体を焼く臭い、血の臭い、硝煙の臭いです。

このような場面は戦争映画でもＴＶニュースでも決して出てきません。しかしこういう場面こそベトナム帰国後の私の悪夢の正体だったのです。

このように殺戮に明け暮れていた私が何

をきっかけに戦争の恐ろしさに目覚めたのか、よく質問を受けますが、いくつものきっかけがありました。その中でも私の生き方を決定的に変えた出来事がありました。

私たちの中隊がある村を通過しようとしていたときに敵の奇襲攻撃を受け、多くの仲間達が死に、私たちは命からがら逃げ回りました。私はある民家の裏手にある防空壕に飛び込みました。入ったとたん誰かいるなと気づいて振り向きました。そこには年の頃15、16の若いベトナムの女性がいました。

彼女はモンスターでも見るかのように私を怖がりましたが、なぜか動けない理由があるようでじっとしていました。暗い中をはって彼女に近づいてみると、非常に荒い息づかいをして苦しそうにしており、腰から下は何もまとっていませんでした。ふと見ると足の間に何かが見えました。あとから考えるとそれは赤ん坊の頭だったんですが、その時は何なのかわかりませんでした。しかしその女性がひときわ大きくいきんだ時、私は思わず手を差し出しました。すると驚いたことが起こりました。彼女の体の中から出てきた赤ん坊がちょうど私の手の中に産まれ落ちたのです。赤ん坊の体には後産がついており、湯気がたちのぼっていました。女性は私から奪い取るように赤ん坊をとりもどし、自分の歯でへその緒をかみ切り、黒い布に赤ん坊を包んで壕から出て姿を消しました。あとに残された私は、いま見ていたことが夢でもあったかのように呆然としていました。しかし自分の手にはお産のあとが残っていたのです。やがて壕から出た私は全く別の人間に生まれ変わっていたのだと思います。戦闘はもう終わっていて、生き残った海兵隊員の仲間からどうしてた？と口々に聞かれましたが、私はその時の体験は誰にも語りませんでした。

この出来事は私にとって決定的な意味を持っていました。赤ん坊の誕生に立ち会うことによって初めて私はベトナム人もまたおなじ人間だという思いを持ったのです。というのはそれまで訓練期間などを通じて、ベトナムの人たちのことをベトナム人と呼ぶことはありませんでした。海兵隊員は彼らのことをグークス（浅黒い連中という意味の蔑称）、共産主義者、目のつり上がった連中、というふうに呼んでいました。海兵隊では彼らは人間ではないと洗脳していたのです。

平和はまず家庭生活から

11年前に普天間基地返還のきっかけになった12才の少女のレイプ事件がきっかけとなり、私は沖縄の人たちに招かれて話をするようになりました。それ以来、私は沖縄の人たち、日本、そしてアメリカの人たちと手をたずさえて沖縄の米軍基地撤去を要求運動を続けているのです。もちろん本土の基地もすべて閉鎖されるべきです。第二次大戦が終わって久しいわけです。アメリカが本国に引き揚げてもよい時期がきています。日本の被占領の状態に終止符を打つべき時です

1996年に来日した折、日本の平和運動をしている方から日本国憲法について教えてもらいました。はじめて憲法第九条を読んで、その力強さ、美しさに目からウロコが落ちる思いをしました。

私は日本の小学校や中学校などを訪れて、日本の若者を前にすることが多いわけですが、日本の子ども達の顔は独特の美しさをもっていると思います。それは戦争を知らない子ども達の顔です。つまり父親や兄やおじさん、あるいは近所の人たちが戦争にとられていないということです。そのような状況にあることの幸せを改めて実感していただきたいと思います。というのも、世界のほとんどの主要国の子ども達は戦争を知っています。しかし日本の子ども達は戦争の恐怖や悲惨さから守られて来ました。

そしてそれこそが第九条のもつ力です。

しかしご存じのように、今や国会議員の大半は第九条をなきものにしようとしています。今こそ日本の人たちは立ち上がって声を大にし、憲法九条を守るべき時です。

というのも、この第九条は日本の人にとってだけではなく、地球上の全ての人にとって大事なものなのです。私はアメリカ人なので、アメリカにこそこの第九条があってほしい。また地球上のすべての国に第九条があってほしいと思います。

ここでぜひ心にとどめてほしいことがあります。世界平和はアメリカが作るものではありません。あるいは国連にまかせておいていいものではありません。世界平和はどこから？　まさにこの部屋に集まられた一人一人の気持ちから生まれてくるものです。

質問●　戦争はなくすためにはどうすればいいと思いますか？

アレン●　戦争だけではなく暴力は日常生活の中で絶えずあります。私の講演会にこうして来て下さる方々はたくさんおられますが、２時間の話を聞いて、終わったら隣の人と話もせずにさっと帰ってしまう。これも暴力ではないでしょうか。戦争を止めるには、私たちがまず自分自身を変えなければなりません。隣の方がもし知らない人でしたら、お互いに紹介しあってよかったねーと言いながら別れてください。それが自ら暴力を捨てる最初の実践になると思います。そういう形でお互い大事にしあいたいと思います。この社会の中で、自分のことだけで精一杯だというふうに追い込まれているわけですが、それが戦争のもっともベーシックなところでの原因となっています。

まず私たちの生き方を改めなければならない。それが子ども達への手本となるでしょう。

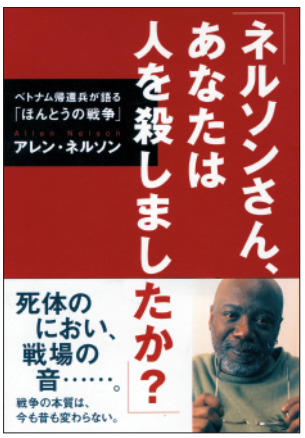
平和というのはまず家庭生活から始めなければなりません。家庭というのはもっとも暴力的な場所です。そこでは絶えずドラマが起こります。夫婦のお互いへの話し方、子どもへの接し方、‥実際には手で叩くよりも言葉の方が傷つけやすいことがあります。戦争に反対して平和活動をしている方もいると思いますが、まず家庭の中で平和を実践しなければなりません。家庭の中が一番難しいところです。　●

★講演会の情報、依頼したい人は：
TEL.0797-72-7550 平塚

憲法９条を守り世界に広める署名運動

アレンさんの話を聞いた人が米国政府に対して始めた署名運動。集まった署名を持って五月頃にはアメリカに持っていく予定なので協力を！

◆署名用紙の請求は＝〒573-0013 大阪府枚方市星丘2-4-13 早瀬方　アレンと９条の会 まで



アレンさんの話は小中学生でも読みやすいような本として出版されている。講談社刊・一三〇〇円　全国学校図書館協議会選定図書　この他にマンガ本にもなっている。「ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？／東京大空襲」講談社刊・六一九円

今はまだアレンさんのウエブサイトはないそうですが、近々アマナクニがボランティアで作ることになるかもしれません。